



学部長就任にあたって

教育学部 那須俊夫

このたび、思いがけなく教育学部長に選ばれ、4月1日からその任に当たることになりました。「数学科内容学」という新しい講座の基盤づくりを委託され旧教育学部に赴任して以来、日夜あれこれ思いを巡らせていた新参の私にとっては、教育学部長という職は余りにも重責に過ぎ、その大任を果たし得るや誠に心もとなく思っています。しかし、選ばれたからには、それを巡り合わせと受けとめ、課せられた務めを私なりにつとめ、皆様方のご期待にお応えできるように最善の努力をしたいと考えています。学部構成員はもとより、関係各位のご協力を切にお願いする次第です。

いうまでもなく、教育学部は東千田と福山に分かれて発展して来た両部局が、平成元年夏、新キャンパスに統合移転して生まれた新しい学部であります。新しいとはいえ、東千田の旧教育学部は高師・文理大以来培われてきた伝統を、また旧福山分校は女高師以来の伝統を、それぞれ、背負っての統合移転であった訳です。当然のことながら、統合に伴い、この両部局の管理運営体制をどう調和させるかが、ここ数年間における学部の課題であったと思います。

移転後1年半を経過した今日、前学部長をはじめ、学部構成員一同の丸となったの努力が実り、学部の運営は着実に軌道に乗りつつあります。また、移転時の最大の懸案であった体育諸施設も平成2年度中に相次いで完成し、当面の教育体制に支障のない程度には整備されてきています。移転前後のこのような流れを受け、さらに学部運営の基礎を固め、

教育体制をより充実・発展させることが私に課せられた第一の使命と考えています。

さて、教育学部の学部統合は学科間のみならず、例えば、教科教育学科の国語、英語、社会科、数学、理科の各教育学専修にあっては、講座間の統合でもありました。この結果、統合移転は必然的に学部内の研究教育に新しい形態を産み出そうとしています。しかし、一方ではこのような新しい気運を育て、他方では伝統的学問分野の独自性を尊重しつつ、しかも学部統合のメリットを最大限に活用した研究教育機能を創り出すことは容易ではありません。

戦後間もなく、まだ院生であった私はフランスの著名な数学者 C.Chevalley (1909～1984) 氏の講演を理学部1号館で拝聴する機会に恵まれました。当時、原爆の跡はなお生々しく、教室の天井はむき出しであり、床は粗末な板張りでした。私の恩師が「こんな粗末な教室しか準備できなくて……」と申し上げた所、Chevalley 教授は「大学は建物ではない。その中で何が行われているかが問題だ」と答えられた後、物静かに講演を始められました。この光景は私には終生忘れ得ぬものの1つとなっています。

研究教育環境は良いに越したことはない。しかし、より重要なことはその中でどんな魅力のある研究教育が行われているかである。当面の責任者の一人として、衆知を集め、教育学部として何が最善の方策であるかを模索する積りであります。皆様のご協力をお願いする次第です。